

狩猟界の展望

徳島県 久米 稔

この度、諸先輩多い中では御座いますが小職の拙い経験から今後の狩猟界を展望してみたいと思います。

小職が狩猟を始めたのは、昭和48年の高度成長期で日本中が希望に満ち溢れ、現在の中国と同じように国民は豊かになり、狩猟もスポーツとして位置づけられ、多くの若者が狩猟免許を取得した。この時代の若者の少年期は、今と違って集落の子供は幼稚園生から中学生まで皆が一緒に遊び、ガキ大将の下で色々な遊びを通じ社会人としての秩序を学んでいた。学校を終えると神社等にあつまり夕刻まで遊び呆けていた。中でも男子は全員が 檜の二股枝を加工し先端にゴム紐と革を結んだパチンコ（当地はゴム中と言っていた）をナイフで器用に作製し自慢し合っていた。パチンコはほぼ全員が持っており、革に小石を挟んでスズメなどの小鳥を撃つのがお決まりの遊びだった。

上記の様な環境で育った若者も高度経済成長の恩恵を受け、バイクや車を購入できる豊かな社会に入り、更に趣味へと進化していき、ある者は狩猟へと自然に入って行った。小職もその一人である。当時の山野は、里山はもちろん奥山においても植林事業が進み、農業や林業従事者も多く、しかも若かったこともあり、非常に手入れが行き届き、農道や林道も次々と延長され、車が入れなかった山村の集落にも立派な道路が整備され、狩猟人口が大きく増加する要因にもなった。当時の狩猟は、キジ、ヤマドリ、キジバト、カモ等が豊富に生息したことから主に鳥猟が主体であった。しかし、イノシシ、シカ等の生息地は山深く、生息数も少なかったことから獣猟をやる者は少なかった。

当時、狩猟に行くと何十人ものハンターと出会い、日曜日ともなるとこの山に行ってもパンパンと銃声が日没まで聞こえた。事故が起らないのが不思議なくらいで、少々怖かった。この様なことがあり、念願の鉄砲をもち狩猟をすることになったが、今後続けることに躊躇する毎日であった。今日まで狩猟を続けられたきっかけは、ある山に早朝キジバトを撃ちに行ったおり、同じ猟友会の故前田氏と出会い、ノウサギ狩りを共猟させて頂き、ビーグル犬の追い鳴きに大変興味と感動を得たことが主因である。その後ビーグルでのノウサギ猟で鳥猟ハンターにも見切りをつけ、危険性のない楽しい狩猟を手に入れ今日まで38年間継続している。この間、狩猟のみならずビーグルの魅力に深入りし、ビーグル競技会への挑戦となり、時には10数頭を飼育するまでになり、家内にも大変迷惑をかけた。当時国内のビーグル競技会は東京奥多摩と愛媛県宇和島のクラブのみであり、是非徳島県にと言うことから三好郡池田町の故笹本先生と「徳島県ビーグル愛好協会」を設立しビーグルの改良と普及に努めた。その後全国的にビーグル競技会が開催されるようになり昭和55年から（社）全

日本狩猟倶楽部で全国大会が開かれるようになった。お陰様で小職が繁殖した「シコクプリンス・ブーギース・マリー」号が、第12回全国ビーグル狩野競技会の成犬部門で優勝し内閣総理大臣杯を手にする事ができた。現在も初代から数えて12代目を数える系統を保存している。詳細は、ホームページ「狩猟系ビーグルの館」で検索し、ご覧ください。

さて今日の狩猟はどうであろうか。当時農山村等から金の卵として大都会に出て行った若者は、都会の便利で豊かな生活に順応し重労働で利益も少ない故郷に見切りをつけたことから、今や繁栄していた農山村集落は、老人ばかりで畑や密植されたスギやヒノキは間伐時期も失い荒れ放題である。一見緑豊かな森林の様に思われるが、現状は石ころだらけのやせ細った地肌にしがみ付いていると表現すれば分かりやすい。また地球温暖化の影響で異常気象が発生し、集中豪雨が頻繁に発生し、更に荒廃に拍子がかかっている。この様な状況から、先祖代々の土地をしかたなく放棄し、離村する人口に歯止めがかからず、かつて繁栄を放った集落も、今やイノシシ、サル、シカが異常繁殖し新たな住民となっている。誠に嘆かわしいことであるが、この間僅か50年の出来事である。誰がこの様な状況を想定しただろうか。対策として狩猟期間の延長や有害駆除を行っているが、それは目先の施策でしかない。また対策が我々ハンターに託したものであり、この当事者であるハンターも現在では70前後の高齢者が多く、しかも銃刀法や狩猟法の強化でハンターを辞める者に拍車をかけている。今後5年か10年の内にはハンター人口も激減し、有害駆除も手に付かなくなるだろう。また、最近では有害駆除をしているハンターへの社会目線も非常に厳しくなり、駆除隊への参加拒否の一要因となっていることも猶予すべきであり、我々ハンターの有用性を農山村の利害関係者だけでなく、社会問題として理解と協力を求める努力が必要である。今後は、我々ハンター、猟友会、関係当局等が一致結束し、情報の発信や共有を積極的に行い、次世代への狩猟継続に繋げ、強いては農山村との共存共栄を育んで行くことが急務と考える。

結びとなりますが、この度拙い私見を述べさせて頂きましたが、狩猟継続にはハンター自ら襟を正すことが責務と考えます。今後の狩猟界再生を祈念し筆を置くこととします。

追記

小職は、10年前より日本唯一の固有ハウンドである純血サツマ（サツマビーグル）の絶滅を危惧し、小職が運営しているホームページ「狩猟系ビーグルの館」に“サツマビーグルのルーツ”を掲載し、同種の保存を呼び掛けてきた。しかしながら、飼育者の高齢化や他犬種とのあんな交雑等により今や絶滅の危機に瀕死している。数年前より同犬種発祥地の鹿児島県のサツマ愛好家から

小職の所に同系保存の強い要請があり、一昨年の定年退職を機に微力ではあるが尽力することを約束し、保存に着手することになった。しかしながら、猟芸は別として小職が昔見たサツマとは程遠い体型に変化し落胆した。そこで再三鹿児島に出向き純血サツマを探すことになり、約3年を要しようやく昨年牡、牝2頭の若い優秀な純血サツマを手にする事ができた。この2頭は今猟期使用したが、両犬ともノウサギ猟では既に完成犬となっていたが、当地徳島県ではノウサギは激減し、代わりにシカが異常繁殖している。しかし、同犬が活躍していた地域にはシカは殆ど生存していないと聞いており、不安と期待の中、山に入れてみた。結果は小職の心配をよそに、下から吹き上げてくる臭いに鼻をビクビクするや、大きな声を張り上げて綱を強く引っ張るので放犬すると一目散に坂を駆け下りると直ぐ追い鳴きとなり、約1時間の追跡で雄シカを捕獲した。その後も同様に今猟期は単独猟で約6頭のシカを捕獲した。

純血サツマは、アメリカンビーグルのシカ猟とは全く異なり、早いお越し、ダイナミックな追跡、スピード、スタミナ、追い鳴き共に申し分なく、特に帰りが良いのが助かる。今後の保存に大きな期待と害獣駆除に夢を与えてくれた。今や全国的にシカの異常繁殖が問題となり、その被害も甚大である。“シカの天敵サツマ”として今後同種の再生・保存と普及に努めていきたい。また同種は、丈夫で家庭では大人しく、尻癖においては全くアメリカンビーグルとは比較にならない程良く、綺麗好きで子供等にも大変優しくペットとしても非常に優れた犬種と言える。

純血サツマの保存を真摯に考えている諸先輩との交流や同種に関する情報をお持ちの方は是非ご連絡ください。

連絡先 (090-7787-3299 久米)